

2016.10.30

「気象コンパス」主宰

古川 武彦



天気を知る

气象台」。そこでは天気予報のほか、雲などの観測も行っている。一方、これまで有人であった約90の「測候所」は、帯広と名瀬を除いてすべて無人の「特別地域気象観測所」となり、自動観測・通報に切り替わった。

観測所で珍しいのは天気を観測するための一助である「視程計」=写真=だ。「視程」とは地表付近の大気の混濁度の指標、見通し距離で表す。投光部からレーザー光を照射し、受光部で散乱光を受ける。辺りに微細な水滴などの混濁物が多いほど減衰が大きくなるので霧(もや)や霧が判別できる。測候所では視程計のほか、雨を感じる「感雨計」、「温度・湿度計」などのデータから理論的に天気のアロリズムを組み立て、気象庁に自動的に通報している。テレビなどにの天気情報の裏側も日進月歩だ。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)

館山特別気象観測所の視程計(銚子気象台提供)



家庭でも職場でも天気が気になるが、24時間体制で提供しているのが気象庁。一口に良い天気と言っても、客観的に表現し、観測するのはかなり工夫が必要だ。「天気」とは「風や雨、雷などの大気現象と雲に着目した大気の状態」と定義されているが、そのうち雲や霧などの観測は、明治6(1873)年の気象庁の創立以来、人力による目視や耳が基本であった。しかしながら、近年、気象学や観測・IT技術の進歩を背景に省力化が進められ、現在、人が常駐しているのは各県などにある約60の「地方

2016.11.6

「気象コンパス」主宰

古川 武彦



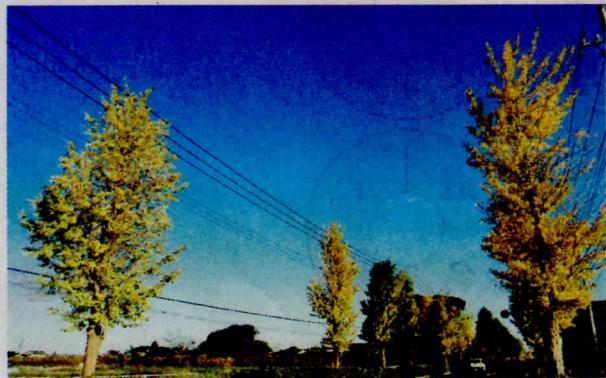
木枯らし1号

表している。ちなみに近畿地方では10月29日だった。

「西高東低」とは冬型の気圧配置の特徴を直感的に表現した用語。西方のシベリア大陸方面に高気圧(西高)が、逆に東方の太平洋上に低気圧(東低)が発達する冬型のパターン。等圧線が南北の縞(しま)状になることから「縦縞模様」などと表現されるが、気象学では間隔が狭いほど風は強くなる。

仕組みを手短かにいえば、秋になるとシベリア大陸では短い昼間と弱い日射、放射冷却によって寒気が蓄積されて高気圧が発達する。一定以上に蓄積(発達)が進むと日本列島にも南下し、北寄りの強風をもたらす。再び寒気の蓄積と南下を繰り返す。県北から霜が降り始め、山々から雪便りが届く。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



木枯らしは晩秋から冬にかけて吹く北寄りの強い風を意味するが、その季節感をとらえた情報が「木枯らし1号」。やがて発表だ。人は冬の到来が近いことを実感し、街路樹などの落葉が一層進む。その定義は「10月半ばから11月末まで、気圧配置が西高東低の冬型で季節風が吹き、風向きが西北西～北で、最大風速がおおむね8m/s/秒以上」。

東京のみの観測で総合的に判断されるが、この気象条件は関東地方でも同じと考えられるので「関東地方に吹いた」と発表される。1号のみで2号はない。東京では1951年以降、毎年発